

大学入試を含む将来への不安

三年生の夏も終わり、高校生活の終着点を意識する季節です。すべてのものごとは、終わりは始まりであり、始まりは終わりであります。秋の始まりは、夏の終わりであり、高校生活の終わりは次の生活の始まりです。

進路選択が現実のものとなったときに、はたと困ることがあります。なぜなら、実感がないものへの挑戦であり、実績がないことへの挑戦でもあるからです。

何となく、大学入試センター試験の申し込みをする、大学の資料を取り寄せる、将来への展望を考え、学部学科を特定し、模擬試験などの結果から、おおよその志望大学を選定する、そのことを親と協議するといった段階に来たとき、果たしてこの道でよいのか、これ以外の道はないのか、このことに決めて後悔しないのかを考えてみると漠然として答えが出ないことがままあります。

私自身もそうでした。何となく文学を志望しながら、経済学をやって資格を取り、趣味として文学を行うべきではないかとか、サラリーマンになるためには東京の大学を志望した方がよいのではないかとか、地方の国立大学でも、傾聴すべき講義を行っている教授はたくさんいるはずだとか、心ゆれた数ヶ月を過ごした思いがあります。ぼうっと流れる雲を見ながら授業に身が入らない日々もありました。

自分の子供の時は、かなり神経質に対応するしかなかったことを記憶しています。教員としての情報が多くある故に、親として何を言うかより、教員口調で話してしまうことで嫌われることもありました。黙って、背中を見せているだけの半年1年であったと記憶しています。

基本、子供が決めたことには口を挟まない、やりたいことをやりなさいの一言だけでした。長女は、1年時の担任の先生の影響が大きく、かなり綿密に彼女の特色を引き出していただいた進路指導があったので安心していましたが、長男は、やりたいことも分からないというので、今は分からなくて当たり前なので、やりたいことが見つかる可能性の高い方向を考えればというだけ言って、彼の判断に任せました。危なっかしいことが山ほどありましたが、強制的な言い方だけは我慢しました。でも、もう少し、遠慮せず、言うことは言った方が彼のためになったこともたくさんあったと思います。

この時期、そんなことで、保護者の皆様もいろいろな試練に遭遇する季節です。是非、担任と話したり、子供と接し方を考えてみる季節でもあると思いますので、よろしく願いいたします。